

幼児期に良い音を聴くことの大切さ

平成24年度 公益財団法人 東京都私学財団 私立学校研究助成事業 報告書

常盤台バプテスト教会附属 めぐみ幼稚園

1. はじめに

「大きな音を出すと、子どもはより大きな声で話さなければならない」

「自分の美しい声で歌うと、人の歌にも耳を傾けるようになる」

めぐみ幼稚園では、情操教育の一つとして音感教育に力を入れて参りました。通常の保育には、声を張り上げる必要はなくて普通の声で十分だと考えています。それによって、園児はじっと耳を澄ますと共にその指示や意向を察知して自分から動いてくれます。また、歌を歌うときにもいたずらに声を張り上げることはしません。歌詞を理解して、美しい声で歌うことを心から楽しんでいきます。

筆者らは、さらに一歩進めて、子どもたちにとって良い音とは何かを考えてみることにしました。今回、様々な音楽を子どもたちに聴き比べてもらいました。面白い、不思議な発見がいくつもありました。それらをご紹介するとともに、次の研究テーマへの取り組みに向けてさらに歩みを進めたいと考えております。

2. 研究のねらい

本研究を開始するに先立ち、筆者らは保育の現状を振り返り、研究を進めるに当たっての背景や前提条件を検討し、研究のねらいを下記のように確認しました。

- 日々成長している子どもたちに、より良い音（声色や音色など）を提供できるようになることで、より良い保育者となれるのではないかと考えたこと。
- 音楽に興味があり、歌が好きな子どもは、新しい歌、暗唱文、人や物の名前などをすぐに記憶することから、そのような子どもは記憶能力が高いのではないかと考えたこと。
- 英語教育と聴覚発達に与える影響を知りたいと考えたこと。とくに、音楽が好きな子どもは、英語の理解力や発音にも優れており、これらの関連性を知りたいと考えたこと。
- 音の大きさやその質（種類）によって、子どもたちの反応が大きく変わることを経験している。この経験を体系的にまとめたいと考えたこと。

3. 研究内容

幼児期における成長に最も重要な役割を果たす感覚の一つである聴覚に焦点を当て、「幼児期に良い音を聴くことの大切さ」に関する研究を行うこととし、「音楽の聴き比べ」を下記の要領で実施しました。

対象及び方法

年長児16名（男児5名、女児11名）及び年中児24名（男児12名、女児12名）を対象に、雑音を遮断したホールにクラス毎に着席させ、園児が落ち着いたところで「これから色々な音楽が聴こえてきます。聴こえてきた時に、楽しいな、嬉しいな、と思ったらニコニコ顔、嬉しい顔をしてください。悲しいな、と思ったら悲しい顔をしてください」と協力を求めました。使用した音楽は下記に示す通りであり、園児の着席から最後の曲の聴取までの一部始終をビデオカメラで撮影して、園児の個々の行動、顔の表情、言動などについて詳細に分析しました。

結果

分析結果の一部を下記にまとめました。

(1) わらべ歌 「かごめかごめ」（伴奏なしで子どもが歌っています）

ニコニコ顔が最も見られた曲の一つです。しかし、歌詞を口ずさんでいる子どもはおらず、これまでこの曲を歌ったことはほとんどないようでした。当幼稚園では、わらべ歌としては、「はないちもんめ」などを歌って遊んでいます。



(2) 宮城道雄作曲 「春の海」 (1929年に作曲された箏曲です)

箏曲にもかかわらず、全く違和感はないようでした。静かに、そして、すがすがしい顔をして、聴いていました。元園長が時々琴を弾いてくださいましたので、その音色を覚えていたのかもかもしれません。

(3) ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン作曲 「交響曲第5番『運命』第1楽章」 (「ダダダダーン」という有名な動機で始まる曲です)

最も大きな動きが見られたのは、この曲でした。興奮して立ち上がる子ども、椅子から滑り落ちる子ども、指揮の真似をする子ども、バイオリンを弾く真似をする子どももいました。いずれの園児も真剣そのものでした。



(4) アメリカの子ども歌 「Wheels on the bus」 (アメリカの子どもは誰でも知っている曲で、英語で歌っています)

一番表情が豊かになって、体を動かしたのがこの曲です。年長組を対象に実施している英語の講座、そして課外で行っている英語の講座では扱ったことのない曲ですので、歌詞は全く分からないはずですが、全員が椅子に座ったままで体をゆすっていました。

(5) 由木康作詞 フランツ・クサーヴァー・グルーバー作曲 「きよしこの夜」 (女性が日本語で歌っています)

めぐみ幼稚園では、毎日、讃美歌を中心に様々な曲を歌っています。今回、全園児が知っている唯一の曲でした。前奏から歌に移ったところで顔がほころび、最後には全員で声を合わせて歌いました。

(6) フレデリック・フランソワ・ショパン作曲 「ピアノソナタ第2番第3楽章『葬送行進曲』」
(全体に悲劇的かつ陰鬱な曲です)

悲劇的かつ陰鬱なこの曲に、誰一人として言葉を発するものはなく、常に顔はこわばっていました。後ろを向く子ども、横を向く子ども、欠伸をする子ども、あたかも早くこの曲が終わって欲しいと望んでいるようでした。曲名が「葬送行進曲」であることは、勿論、知る由もありませんし、その意味することも知らないはずですが、この子どもたちの素晴らしい感性に驚かされました。なお、一人、曲に合わせてピアノを弾く真似をする子どもがいました。

(7) モーリス・ラヴェル作曲 「ボレロ」 (最後の2小節を除く、最初から最後まで同じリズムが169回繰り返されます)

この曲が掛かってから、しばらくすると、急に隣同士が話を始め、一番賑やかでした。テンポを取りながら体を動かしている子どももいました。

(8) アメリカの子ども歌 「Itsy bitsy spider」 (アメリカの子どもは誰でも知っている曲で、英語で歌っています)

アメリカでは、手遊び歌として知られている曲です。外国から帰国した子ども、そして、英会話を習っている子どもは、クモがよじ登る様子の振りをつけて口ずさんでいました。さらに、英語の歌詞には、全員まったく違和感をもってはおらず、すぐに「英語の歌だ」と認識していました。



(9) 高野辰之作詞 岡野貞一作曲 「朧月夜」 (女性が歌っています)

最も反応しなかったのがこの曲でした。「かごめかごめ」には反応していた園児ですが、これには驚きました。日本語の穏やかな曲にもかかわらず、歌詞が難しく、意味が分からないこともあるのでしょうか、これも不思議なことでした。

さらに、成長背景や普段の生活環境の相違が音感や聴力に差異が出る可能性が高いことから、特徴のあった数名を取り上げて行動・表情等との関係を詳細に分析しました（分析結果は省略）。

考察

今回、得られた結果を基に考察してみますと下記ようになります。

- 様々な音楽を子供たちに聴き比べてもらいましたが、ジャンルやリズム、使われている言語などには関係なく、音に対する反応が早く強く、表情が豊かな子どもはいつも固定していました。なお、それぞれの曲に対する子どもたちの最終的な反応には大差はなく、大きな違いは反応の早さであることが分かりました。
- 家族の影響、とくに親と兄姉の影響が大きく関わっていることが確認できました。親が楽器（ピアノ等）を演奏したり、音楽教育や語学教育に熱心なご家庭の子どもは、音に対する反応が早く強く、しかも表情が豊かでした。
- 音楽教育と語学教育との相乗効果がみられました。たとえば、チャンツによって、日本語にない子音などを自然に学ぶことができます。また、音楽を楽しむことにより、音域の狭い日本語の会話では得られなかった音域が広がることが知られています。実際、音に早く強く反応する子どもは、英語の覚えも良く発音がきれいな子どもでした。このように音楽と語学との相関が強く見られました。
- 音楽とリトミックとの相乗効果も確認されました。表情豊かな6名中5名が課外活動としてリトミックの講座を受けていました。逆に、リトミックの講座を取っている7名中5名が、驚くべきことに音に対する反応が早く強く、表情豊かな園児と一致していました。この5名は、リトミックの講座でも集中力に優れ、お友だちの話をよく聴くことができ、即時反応も優れていました。リトミックに興味があって積極的に参加した子どもだからこそ音楽にも興味があるという可能性もあり、今後、さらに研究を深め因果関係をつきとめて行きたいと思えます。

今回の研究を通して、たくさんのお話を学びました。とくに幼児期保育への細やかな配慮の大切さを改めて認識いたしました。他の人と同じことをすることが必ずしも良いことではありません。一人ひとりの個性を大切にしたい保育を今後も推し進めて行きたいと思えました。これから益々必要とされる多様性を認容できるグローバル人材として、子どもたちが育って欲しいと願っています。

ます。

今回の研究成果を基に、積み残しの課題についても、今後、仮説検証を進めたいと考えております。

最後に、年長組及び課外の英語指導をお願いしている栗林美知子先生、そして、課外のリトミック指導をお願いしている仁井田安子先生、さらに、常盤台バプテスト教会の友納靖史牧師に、今回得られた結果の考察にご協力をいただきました。心より感謝いたします。

熊谷 文男（代表） 高瀬 真理子 弓倉 真実 助川 賀子 小河 美樹 谷口 由華 篠 文子